

恋愛と売春

はじめに

さて、今回の『恋愛と売春』という作品は、次のような内容のものであり、それは、まず、「恋愛」（恋）というのは、プラトンの『饗宴』という著作の中なかでは、「……その昔むかし、人間の本来の姿は、第一に、人間は三種類あった。すなわち、今日の男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』（男女おめ）というのが一種をなしていて、容姿、名前とも男女を合わせ持っていた。しかも、強さや腕力にかけても、彼らは剛こうの者で、その心もまた、驕慢きょうまんであった。そして、神々に刃向かうようになった」。——そこで、最初は「一つの体」（男女おめ）であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」（つまり男と女）に引き離されてしまった。そうなると、今度は、自分の「半身（片割れ）」にぜひともめぐり逢いたいという強い欲求に襲われるのが、まさに「恋（エロス）」であるということである。

次に、「売春」の問題であるが、それを辞書で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、「愛情関係」は、基本的にはないことが多いのだろう。むしろ、「愛情関係」があるなしではなく、いわゆる「……報酬を得て、男子に身を任せる」ところに、「売春行為」が成り立つのである。それでは、「報酬」を得なければ、「売春行為」にはならないのかと問われれば、もちろん、それは、「売春行為」にはならず、ただの「遊び行為」になるのである。——そして、「売春」が成立するためには、どうしても次の「三つのもの」が一般的には必要不可欠であり、その一つは、富める側の人たちであり、次には、貧しい側に存在する女性たちであり、そして、もう一つは、この「二つのもの」が結びつくための「場」（古くは「売春宿」ということである。もちろん、直接、相手との交渉によって、「売春」が成立する場合もあるが、それは、目に見えない「場」（つまり「女性自身のみならずから売春宿の主あかじ」）となって交渉し、いわゆる「売春」が、実際に行なわれるのであり、結局は、同じことになるのである。

以上のような内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和二年三月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

恋愛について

- 一、 恋（エロス）
- 二、 一目惚れ
- 三、 恋の最終地点

よき伴侶（ベターハーフ）

売春について

- 一、 売春の定義
- 二、 自己同一性の喪失
- 三、 セックスとは

売春の起源

- 一、 売春は、なぜ悪いのか？
- 二、 売春の実態
- 三、 結論

※ 参考文献

恋愛について

恋愛について

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋(エロス)」について非常に有名な話(演説)をする箇所があるので、その部分を拾い集めて要約してみると、次のようになるかと思う。

「……さて、諸君は、はじめに、人間の本性と、かつて人間にかかわりのあった事件とを学ばなければならない。そのむかし人間の本来の姿は、第一に、人間は三種類あった。すなわち、こんにちの男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』(男女)というのが一種をなして、容姿、名前とも男女を合わせ持っていた。しかも、強さや腕力にかけても、彼らは剛の者で、その心もまた、驕慢であった。そして、神々に刃向かうようになった。……」

そこで、ゼウスをはじめ、ほかの神々は、彼らをどう処置したものか、寄り合い相談したが、結論が出なかった。(中略)、そこでゼウスは、さんざん考えたあげく、「……このたびの処置としては、彼ら一人一人を二つに切り離そうと思う。そうすれば、いまよりも弱くなるだろうし、それに数もますことであるから、われわれにとつて、いまよりも有益なものになりましょう。そして彼らは、二本足でまっすぐ立って歩くことになるだろう。

——ともあれ、ぼくらは、平目のように、一つものを半分に分断されたのだから、一人一人が人間の割符というわけだ。だから、だれもが自分の割符を探し求めるのは、当然なのである。そして男性のなかでも、そのむかし男女と呼ばれていた両性者の片割れは、女好きであり、また、逆に、女性のほうでも、この男女の片割れは、男好きである。ところが女性のなかでも、割かれる以前の女(女女)の片割れは、むしろ女性に傾いていく。また、もともと男(男男)の片割れである男性は、男性的なものを追求し、少年のうちには、成人の男性を愛し、好んでその人たちのそばに寄り、そして、からみつく……」。

ただ、彼らは、おたがいに相手から何をもらいたいか、それを言葉にあらわすことはできないのだろう。そこで、『……いったい、おまえたちが求めてやまないものは、できるかぎり完全に一体なものとなって、昼も夜も相手から離れないようにしたいということなのか……』。この言葉を聞いたら、だれ一人としてこれを否定する者はいないだろう。

(中略)、なぜなら、われわれの太古の姿はそれであり、あの当時われわれは完全なものだったということが、その原因をなしているのだから。されば、完全なものへのこの欲望と追求に対して、恋という名がつけられているのである。……」(『饗宴』189d-193d)

一、恋(エロス)

さて、ここで面白いと思うことは、まず、最初は「一つの体」(男女)であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」(つまり男と女)に引き離されてしまったということである。そうなると、今度は、自分の「半身(片割れ)」にぜひともめぐり逢いたいという強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋(エロス)」であるということである。そして、今日、われわれが「この人しかいない！」と心の底からそう思える相手にめぐり逢いたいと思うのは、言葉を換えれば、それは、まさに自分の「半身(片割れ)」にめぐり逢いたいと探し求めることであり、それが、まさに「恋(エ

ロス)」ということになるということである。

つまり、われわれ人間の「恋心」というのは、確かにいろいろな「異性」とめぐり逢い、そして、できるだけ数多くの異性と「恋愛」をすることが、いちばん幸せなことではないかと思いがちであるが、しかし、最終的にはやはり「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の本来の「恋心」ではないかと思う。確かにまったく別々の環境の中で生まれ育った男と女が、例えば、「割り符」がぴたっと一つになるような、「一体感」がほんとうに得られるかどうかと問われれば、それは、やはりなかなか難しいことになるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」というのは、やはりまさに「割り符」がぴたっと一つになるような、そういう「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の最も根底にある「恋心とその原動力(エロス)」ではないかと思う。確かに、できるだけ数多くの「異性」と親しく交わりたいという思いもあるだろうが、しかし、最終的にはやはりいわゆる「ベストハーフ」(最良の伴侶)にめぐり逢いたいと思うものなのである。なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、その時だけ楽しいとか幸せであるとかいうことだけでは満足できずに、やはりもっと永続した心の底からの「幸せ感」や「満足感」などが得たいわけである。そして、そういう永続した「幸せ感」や「満足感」或いは「一体感」などが得られているような状態こそは、まさにほんとうの意味での「結婚」(つまりは男と女の結びつき)が真にできている状態にあるということである。

二、一目惚れ

例えば、よく『一目惚れ』というものを経験することがあるかと思う。それは、一体、どういふものかと言えば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであったりとめぐり逢った相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ!」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。それは、なぜかと言えば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな!」とか、「あつ、カッコいいなあ!」というような思いに襲われて一杯になつていふために、しばらく「動き」を奪われてしまうものなのである。しかも、一方だけがそういう「一目惚れ」に深く陥るのではなく、二人が同時にそのような「一目惚れ」に深く陥つた時には、その瞬間、「時計が止まった」ような感じで、相手の姿だけが「鮮明に見え」て、それ以外のまわりのものは、ほとんど薄れてしまうものなのである。しかも、お互いがそういう状態で、「相手を見つめながら、立ち止まっている」状態になるということである。もちろん、それは、一瞬のことかも知れないが、その時、一種の「心から心へのテレパシー」のようなものが働いている感じにもなるものである。それは、お互いが「同じような心の波長」を出し合っていて、それが「深く響き合っている」ような感じになる場合も時にはあるのだろう。それゆえ、そのようにお互いが同時に「一目惚れ」に深く陥って動けなくなつたような時には、そのままその場で別れてしまうのではなく、相手のところまで勇気をふるって行き、そして、「いま、どういふ心の状態」で自分の方を見ていたのか、しっかりと確かめてみたらよいのではないかと思う。

というのも、そのようにお互いが同時に「一目惚れ」に深く陥って動けなくなったような時には、ほとんどの場合、お互いの「心の波長」が非常によく似た（或いはよく合う）相手である場合が極めて多いからである。しかも、今、逢ったばかりなのに、なぜか相手との「距離感や違和感」などがまったく感じられず、それは、なぜか非常に遠い昔から親しかった相手にめぐり逢えたような感じにもなるものである。

そして、そのような「感じ」こそは、まさに自分の「半身」（つまり「ベストハーフ」）に遂にめぐり逢えたという時の、まさに「衝撃（或いは感動）」にも通じるものなのである。つまり、われわれ人間は、毎日、実に数多くの「異性」とめぐり逢っているわけだが、しかし、そのなかからどうすれば自分の「半身」（割り符のようにびたつと身も心も一つになれる相手）を見つけ出すことができ得るのか？ もちろん、それは、非常に難しいことに違いないが、しかし、多くの場合、それは、相手にめぐり逢ったその時に、なぜか前述の「一目惚れ」のような「衝撃」が、その人の「心の中」に生じてきて、ふともしかしたら、この人と自分は「結婚をするかも知れない」といった予感めいたものを感じるものではないかと思う。それは、お互いの「心の波長」（或いは「心の波動」）が、どこか深く響き合うようなところがあるからである。

三、恋の最終地点

例えば、距離感や違和感などをあまり感じない。なぜか親近感を感じて、あまりズレを感じない。深く交流できるような感じがする。なぜか心を割って、いろいろ話してみたくなる。話がいろいろとはずむ。なぜか親しみを感じる。お互いじっくりと合う。へだたりをあまり感じない。昔から親しい間柄であったような感じがする。好感が持てる。他人という感じがあまりしない。けんかをして、それほど憎めない。悪ぐちを言われても、それほど腹が立たない。なぜか心惹かれる。なぜか思いが募る。二人でいると、時間の経過をあまり感じない。心からうち溶け合えるような感じがする。その他、そのような「心の状態」がお互いの「心の中」にはつきりと生じてきたならば、少なくとも相手の「異性」とはお互いに「引き合っている」ことになるかと思う。つまり、「男と女の関係」というのは、何も長い時間をかけてはじめて理解し合えるといった性質のものではない。むしろ、相手の異性にめぐり逢ったその瞬間から、あるいは何度かのデートを重ねていくうちに、もう相手の異性に対するあるものを「予知（予感）」して、相手の異性と自分の「心の波長」（或いは「心の波動」）が合うか合わないかを微妙に感じ分けてしまうものである。確かに一緒に生活をしてみて、初めて相手の「性格や性癖」などを知るといえることはいくらかもあるだろうが、しかし、最も根本的なお互いの「心の波長」が合うか合わないかは、極めて初期の段階から感じ分けてしまうものではないかと思う。そして、相手の異性に対して「距離感や違和感」などをあまり感じず、なぜか非常に遠い昔から親しかったように思える相手であり、しかも、「一目惚れ」のような衝撃を感じた相手であれば、結婚をしたあとも、恐らく、お互い「うまくやっていたいける」ことが多いのではないかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、やはりお互いの「心の波長」が深いところで響き合っているからである。つまり、われわれ人間の「心」というのは、確かに数多くの「異性」と親しく交わりたいという欲求とともに、最終的には身も心もびたつと一つに溶け合えるよう

な、まさに自分の「片割れ」(つまり「ベストハーフ」)に遂にめぐり逢えたと思えるような時にこそ、われわれ人間は、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られることになるのだろう。なぜなら、それこそは、まさにわれわれ人間の「異性」を愛し求める「恋」^{エロス}という旅路の、いわゆる「最終地点」(或いは「最終目的」)になるからである。

*

*

よき伴侶（ベターハーフ）

よき伴侶（ベターハーフ）

例えば、われわれ人間というのは、基本的には、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）をいつも愛し求めてやまないものであるが、しかし、現実には、そのような「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというようなことは、なかなかできにくいものであり、それゆえ、多くの場合、理想の相手ではないが、それでもより「よき相手」（つまり「ベターハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。

つまり、「最良の伴侶」（つまり「ベストハーフ」）というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず愛し求めてやまない、まさに「理想の相手」ではあるが、それは、例えば、芸能界のなかでも特に誰々に強く心惹かれて、もう夢中になっているというようなことは、あの意味では、そこに「理想の相手」を見ていることになるのかも知れない。それに比べて、もう一方の、いわゆる「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）というのは、むしろ「現実の相手」ということになり、それは、例えば、現実のなかでめぐり逢う実に数多くの異性のなかでも、特に心惹かれるような異性にめぐり逢った時に、できれば、その相手の異性とつき合いたいと思うようになり、それが、うまくいき、つき合うようになれば、それが、現時点でのいわば「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるかと思うが、しかし、相手との関係がうまくいかなくなれば、今度は、別れるということになり、また、新しい相手を探し求めることになるかと思うが、それは、どのようなことを意味するのかと言えば、それは、まさにより「よき相手」を新たに探し求めるということである。

そして、そのより「よき相手」を探し求めるというのは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、結局、その人の「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢いたいという欲求に他ならないわけだが、しかし、そのような相手を見つけ出すことは、現実にはなかなか難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）により近い相手にめぐり逢いたいと、知らず識らずのうちに、探し求めていることになるのである。——つまり、誰もが自分の「心の中」で絶えず探し求めてやまないものは、まさに「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではあるが、しかし、現実にはなかなかそのような相手とめぐり逢うことはできにくく、それゆえ、その時、その時にめぐり逢ったより「よき相手」とつき合うことになるが、それが、いわば現時点での「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるということである。

それでは、そのような「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）に100%心の底からすべて満足でき得ているものだろうか？ それは、極めて難しい問題であり、たとえ現時点では満足でき得ても、やがては不満が生じて来るとすれば、その「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）も、結局は、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではなかったということになり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢えるまでは、その人の「恋」という旅路は、なおも続くことになるということである。——つまり、われわれ人間の「心」というのは、最終的には、身も心もほんとうにびたっと一つに深く溶け合えるような、まさに自分の「片割れ」（つまり「ベストハーフ」）そのものに遂にめぐり逢えたと思えるような時にこそ、われわれ人間の「心」というのは、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られることになるのだろう。なぜな

ら、それこそは、まさにわれわれ人間の「異性」を愛し求める「恋^{エロス}」という旅路の、いわゆる「最終地点」(或いは「最終目的」)にもなるからである。

良き伴侶

得てぞ知るや

良き人生

さて、ここで最大の「問題」となるのは、次のようなことである。つまり、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋(エロス)」について非常に有名な話(演説)をする箇所があるが、そのなかで、最初は「二つの体」(男女)であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」(つまり男と女)に引き離されてしまうということである。そうすると、今度は、自分の「半身(片割れ)」にぜひともめぐり逢いたいという極めて強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋(エロス)」であるということである。そして、ここで最も大事なことは、相手がまさに自分の「半身(片割れ)」そのものであるならば、文字通り、その「相手」(つまり自分の半身《片割れ》)そのものとは、百分すべてありとあらゆるところまで「割り符」がびたつと一つになるような、まさに完全なる「一体感」がうそ偽りなくほんとうに得られることになるのだろう、それこそは、まさに「身も心もほんとうに一体感が完全なる形で味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものである。——それゆえ、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」)そのものを「ベター」(よりよき相手)と呼ぶことは、明らかに「間違」であり、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」)そのものは、文字通り、まさに「ベスト」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものであると呼ぶべきものである。

ところが、現実の世界においては、例えば、何から何までまったく別々の環境の中で生まれ育った男と女が、例えば、「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「一体感」がほんとうに得られるかどうかと問われれば、それは、やはりなかなか難しいことになるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」というのは、やはりまさに「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の最も根底にある「恋心とその原動力(エロス)」になるかと思う。もちろん、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)とめぐり逢い、そして、その「理想の相手」とつき合ったり、結婚するということは、極めて難しいことであり、それゆえ、文字通りの「理想の相手」ではないが、それでもそれにより近い「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。——つまり、「最良の伴侶」(つまり「ベストハーフ」)というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず想い描いてやまない、まさに「理想の相手」そのものではあるが、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)を見い出すことは極めて難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)ではないが、その「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)により近い相手、つまり、まさに「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)

とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、まさにわれわれ人間のあるがままの「現実の姿」(つまり「現実」そのもの)になることである。

それゆえ、今日、「ベターハーフ」という言葉は、いわゆる「プラトニック・ラブ」という「言葉」と同じように、本来とはかなり違った「意味合い」で使われることが多いかと思うが、しかし、本来は、いわゆる「理想の相手」(それはもともとは自分の「半身」(片割れ≒)そのもの)のことであったが、それとほとんど同等の相手を、まさに「ベストハーフ」と呼び、そして、そこまではいかない「現実の相手」を、まさに「ベターハーフ」と呼ぶのが、まさに「ベストハーフ」と「ベターハーフ」という言葉の「正しい使い方」になるかと思う。

*

*

ベターより

ベストが恋しい

恋心

売春について

この問題は、実に古くて新しい問題であるとともに、未だこれという「最終的な答え」が得られないままに、今日にまで来ているのではないかと思う。——そこで、「売春」について、考えてみたいと思うが、例えば、「売春」という言葉を聞いて、すぐに頭に浮かんで来るものの一つとしては、いわゆる『ヨハネ福音書』のなかに出てくる「姦淫の女」の章があり、その部分を少し長くはなるが、全文を引用して考えてみたいと思う。

「……イエスはオリブ山やまに行かれた。次の朝早くまた宮みやに行かれると、人々が皆あつまつて来たので、座まつて教えておられた。すると聖書学者とパリサイ人じんとが、姦淫かんいんの現行犯げんこうはんで押おえられた女おんなをつれてきた。みんなの真中まんなかに立たせて、『先生、この女は姦淫かんいんの現場げんばを押おさえられたのです。モーゼは律法りつぽうで、このような女おんなを石で打ち殺すように命じていますが、あなたはなんと言われますか』。こう言ったのは、イエスを試ためして、訴うえ出る口実こうじつを見つげるためであった。イエスは身みをかがめて、指ゆびで地ちの上に何か書いておられた。しかし彼らがつこく尋ねていると、身みを起たてて言われた。『あなた達なの中で罪つみのない者が、まずこの女おんなに石を投げつけよ』。そしてまた身みをかがめて、地ちの上に何か書いておられた。これを聞くと、彼らは、老人ろうじんを始めとして、ひとりびひとり出ていって、ただイエスと、真中まんなかに立ったままの女おんなが残った。イエスは身みを起たてて女おんなに言われた。『女おんなの人ひと、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罰ばつしなかったのか』。『主しゅよ、だれも』と女おんながこたえた。イエスが言われた、『わたしも罰ばつしない。おかえり。今からはもう罪つみを犯さないように。』……」

さて、イエスは、実際にこのような場面に直面し、そして、実際にこのような言葉を言われたのかどうか？ つまり、本当のことなのか、それとも作り話なのかという問題が残るが、ここではイエスが実際にこのような言葉を言われたかどうかは別として、ここに書かれている引用文の内容をそのまま受け入れて、考えを前に進めていきたいと思う。

というのも、イエスの言葉に、「……あなた達は、『姦淫かんいんをしてはならない』と命じられたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、情欲じやうよくをもって人妻にんさいを見る者は皆、すでに心の中でその女おんなを姦淫かんいんしたのである。それで、もし右の目があなたを罪つみにいなうなら、えぐり出して捨てよ、体の一部が無くなっても、全身ぜんしんが地獄じごくに投げ込まれない方が得であるから。もしまた右の手てがあなたを罪つみにいなうなら、切り取って捨てよ、手足てあしが一本無くなっても、全身ぜんしんが地獄じごくに行かない方が得であるから。また、『妻つまを離縁りえんする者は離縁りえん状じやうを渡せ』と命じられた。しかしわたしはあなた達に言う。不品行ふへいぎん以外の理由りゆうで妻つまを離縁りえんする者は皆、その女おんなに姦淫かんいんを犯かさせるのである。離縁りえんされた女おんなと結婚けっこんする者も、姦淫かんいんを犯すのである。……」(マタイ福音書)

つまり、これほど「姦淫かんいん」に対しては、きびしい考え方を持っていた人が、いわゆる「姦淫かんいんをした女おんな」をそのまま「黙認もくにん」するようなことを言われるだろうかという問題である。しかし、それはそうではなく、ここで最も大事なことは、最初の引用文のほうは、「姦淫かんいんをした女おんなを他人たにんが石いしをもって罰ばつするという場合」であり、後者の引用文は、「自分自身の淫欲いんよく(な心)を自ら罰ばつするという場合」であるということである。つまり、前者は、「他人たにんを罰ばつする場合」であり、後者は、「自分自身おのれみづかみを罰ばつする場合」であるということである。

そして、最初の引用文のなかで、イエスは、なぜ、「姦淫かんいんをした女おんなを石いしをもって罰ばつする」

ということに対しては、かたくなに沈黙を守り続けた一方で、なぜ、「あなた達の中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけよ」というようなことを言われたのかと言えば、その最も根底にあつたものは、恐らく、次の「自らの言葉」であつたであらう。つまり、「……（人を）裁くな。自分が（神に）裁かれなためである。（人を）裁く裁きで、あなた達も裁かれ、人を量る量りで、あなた達も量られるからである。なぜあなたは、兄弟の目にある塵が見えながら、自分の目に梁があるのに気付かないのか。また、どうして兄弟にむかつて、『あなたの目の塵を取らせてくれ』と言うのか。そら、自分の目に梁があるではないか。偽善者！ まず自分自身の梁を取つてのけよ。その上で、兄弟の目の塵を取つてやつたらよからう」という言葉である。

つまり、大事なものは、何よりも「自分自身の心のあり方」なのであり、他人がどうであるからとか、世の中がどうであるからではなく、他人や世の中がどうであらうと、「自ら不正を行なわない」というところに、いわゆる「道徳（倫理）」の大原則があるわけである。例えば、「……あなた達は、『目には目、歯には歯』と命じられたことを聞いたであらう。しかし、わたしはあなた達に言う、悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打ったら、左をも向けよ。……」とあるが、それは、「不正に対して、不正で仕返しをする」というわれわれ人間の「本能や本性」に深く根ざした考え方に対して、「他人から不正を受けても、自らは不正を行なわない」という考え方に立つわけである。それは、なぜかと言えば、それは、いかなる「理由や正義」があろうとも、いわゆる「不正を行なうこと自体は、決して正しいことではない」からである。——すなわち、「道徳（倫理）」の問題は、いわゆる「自ら故意に不正を行なわない」という、この一点に尽きるのである。（ただし、「自己防衛」のための言動は、それが「故意に不正を行なうもの」でない限りは、許されることになるのだらう。）

もちろん、法治国家においては、何らかの「犯罪」を犯した人は、いわゆる「裁判制度」によって何らかの「刑罰」を受けることになるかと思う。例えば、人殺しを行なえば、その人は、「殺人罪」の容疑者として法廷に立つことになるが、その場合、法廷には、検察側と弁護側、それに裁判官がいる形になるかと思う。そして、検察側の言い分と弁護側の言い分とを聞いて、最終的に裁判官が「判決」を下すことになるが、当の容疑者は、それらの「一部始終」を極めて微妙なところまで感じ分けながら、どこか不思議な思いに襲われているに違いない。なぜなら、人殺しを行なった時の「生々しい状況や心の微妙な動き」などをほんとうに知っているのは、まさに「自分自身（容疑者）」だけだからである。

例えば、初公判において、検察側の「起訴状朗読」を黙って聴きながら、「そこはその通り、そこはそうではない」と、文字通り、一字一句をどこまでも極めて厳密に感じ分けながら聴いているのは、当の容疑者だけであり、それ以外の検事も弁護士も、また、裁判官もその他の人たちも、その最も肝心かつ極めて微妙な「核心部分」については、容疑者が正直に告白しない限りは、何ひとつ厳密には知り得ないことになるわけである。

つまり、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けけるとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないということである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」（或いは「魂の中」）でも、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に

深く内在しているであろう敢えて「内なる神」であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」(その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」)によって厳密に吟味され続けている。内なる「審判」(つまりは「内的制裁」(罰))を受けざるを得ないということである。それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

一、売春の定義

さて、本題である「売春」の話に戻りたいと思うが、「売春」というのは、一体、何なのか？ それを辞書で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、「愛情関係」は、基本的にはないことが多いだろう。むしろ、「愛情関係」があるなしではなく、いわゆる「……報酬を得て、男子に身を任せる」ところに、「売春行為」が成り立つということである。それでは、「報酬」を得なければ、「売春行為」にはならないのかと問われれば、もちろん、それは、「売春行為」にはならず、ただの「遊び行為」になるということである。

そして、われわれ人間が「性交渉を持つ場合」には、だいたい次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。——つまり、一つは、軽い「気持ち」(つまり「遊び心」)から生じる、いわゆる「遊び」型セックスであり、一つは、何らかの「下心」(多くは「打算」)から生じる、いわゆる「打算」型セックスであり、そして、もう一つは、相手の異性に心から「愛情」を寄せていて生じる、いわゆる「愛情」型セックスということになるかと思う。そして、「売春行為」というのは、言うまでもなく、売る側は、「お金」(報酬)を得るためのいわば「打算」型セックスであり、一方、買う側は、(軽い気持ちで)楽しむといういわば「遊び」型セックスになるかと思う。もちろん、実際には「遊び、打算、そして、愛情」などがいろいろとからみ合い、それだけより複雑で生々しい様相を呈しているのだろうが、基本的には、そういうことが言えるのではないかと思う。

また、「売春」を行なう理由としても、やはり、次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。すなわち、一つは、やはり、「遊び」型売春であり、それは、軽い気持ちで性交渉を持ち、そして、そこで得た「報酬」(お金)で、例えば、何かほしいものを買ったり、或いは、旅行に出かけたりするという、いわゆる「遊び」型売春である。次に、「生活」型売春があるかと思うが、それは、主に「生活を維持するために行なわれるもの」であり、それゆえ、経済的に余裕ができれば、行なう必要がなくなる「売春行為」になるかと思う。そして、もう一つは、いわゆる「職業」型売春であり、それは、一般に性風俗関係の店やその他に所属していて、そして、その所属しているところの指示に従って、いわゆる「売春行為」を行なうというものである。

それでは、「売春」のいったいどこがどのようによいというのだろうか？ 一般に、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものではないかという「考え方」があるかと思う。もちろん、そのような「考え方」は、プラトン風と言

えば、われわれ人間の「魂」というのは、「欲望的部分」と「気概（激情）的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、そのなかの、いわゆる「欲望的部分」に支配されている人たちの「言い分」になるかと思う。そして、実際は、好きな時に、好きな相手と、好きなようにセックスをするから楽しいのであり、セックスをしたくない時に、特に好きでもない相手と、セックスをするようなことは、それほど楽しいことではないのだろう。また、その時、その時が楽しければ、それでいいではないかという、そういう「刹那主義」的な「考え方」もあるかと思うが、たとえその時はよくても、長い人生のなかでは、やはりあとで後悔するようなことも多くなるのではないかと思う。

二、自己同一性の喪失

それはともかく、「売春」という行為は、まさに自己の「肉体（性）の商品化」であり、「不特定」（或いは「ある程度特定」）の相手と「性交渉」を持つことによって、基本的には、お金を得ようとする行為である。その場合、一般に、相手の要求に応じて対応しなければならず、そこに「自己放棄」と「自己喪失」とが生じやすくなるとともに、たとえ多額のお金を手に入れたとしても、そのようなことを長く続けることは、自己の「内的崩壊」を招きやすく、自己の「内的足場」を失って、精神的には不安定になりやすいということである。というのも、自己を「商品化」することによって、どうしても相手に合わせた人間にならざるを得ないとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動することをやめて、相手の要求に応じた行動をするようになるからである。もちろん、ここで自己の「商品化」の是非を問題にしているのではなく、自己を「商品化」することによって、その人自身の「本来の姿」を見失うことになるということである。というのも、相手に合わせて、自分をどんな変えていかなければならないからである。それゆえ、われわれ人間にとって最も大事なことは、誰々のようになることでは決してなく、自分の奥深くに眠っているであろう本来の「自分自身」とめぐり逢い、そして、その本来の「自己自身」となって、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になることによってこそ、われわれ人間は、最も生き生きと充実した時を過ごすことができ得るようになるということである。なぜなら、そのような状態こそは、いわゆる「自己同一性の喪失」から真に開放されて、まさに「考える自分と行なう自分」とが完全に一体化している「心的状態」になるからである。

例えば、マリリン・モンローは、当時、最もセクシーな女優として人気があったわけだが、しかし、その「最もセクシーな女優として売っていた」がために、人前では、つねに「最もセクシーな女優」を演じなければならず、そのために、「商品化した自己のイメージ」と「ほんとうの自分との間」に次第にギャップが生じ、その生じてきた「ギャップ」がしだいに深まるにつれて、いわゆる「精神的バランス」を崩し、そして、「精神的不安定」が、さらに深刻化していくなかで、やがて、身を滅ぼすことにもなったのだろう。それは、何もマリリン・モンローだけの問題ではなく、実に数多くの人たちが自己を「商品化」することによって、逆に、その「商品化された自己のイメージ」と「ほんとうの自分との間のギャップ」に悩み苦しむようになり、やがて、いわゆる「精神的不安定」をどこまでも深めてしまうことになるが、それは、まさに「自己同一性の喪失」から生じるものである。

もちろん、それは、何も芸能人だけの問題ではなく、例えば、クリーンな政治家として自己を売っている人ならば、人前では、つねにクリーンを意識した言動にならざるを得ず、それゆえ、何か大きなスキャンダルなどを起こせば、それこそ、まさに「政治生命」にも関わってくる大きな問題になるかと思うが、それは、「言っていることとやっていることとが全然違うじゃないか」というところから生じる問題であり、その人の、いわば人間としての「倫理性(道徳性)」が真に問われる問題にもなるわけである。——つまり、いわゆる「自己同一性の喪失」という問題は、大きく分けて、次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。一つは、こうでありたいといういわば「理想の自分」と、そうではない「現実の自分」との間のギャップに悩み苦しむような場合である。例えば、ほんとうはこういう「職業(或いは仕事)」をやってみたいのに、なかなか思い通りの「職業(或いは仕事)」がやれないという場合や、また、もっと奇麗になりたい、もっとカッコよくなりたいたいという、そういうふうでありたいという「容姿・容貌」への願望と現実の自分の「容姿・容貌」との間のギャップに悩むような場合である。その他、それはもうどういうことであれ、こうでありたいという自分とそうではない現実の自分とのギャップに悩み苦しむような場合である。次は、「自分にまつわり付いているイメージ」と「ほんとうの自分との間のギャップ」に悩み苦しむような場合である。それは、意識的に作られたイメージであれ、あるいは自然発生的に生じてきたイメージであれ、その他、何であれ、「自分にまつわり付いているイメージ」と「ほんとうの自分とのギャップ」に悩み苦しむような場合である。そして、もう一つは、いわゆる「考える自分と行なう自分との不一致」から生じるものであり、例えば、頭の中では、ああしよう言おうと思ったり考えたりしているのに、実際には、それとは違うことを言ったり行なったりしてしまう自分に対して、自分でもあきれってしまうという問題である。

さて、この「考える自分と行なう自分との不一致」から生じる問題であるが、その原因の一つとして考えられるものは、その人の人間としての「内的成長」の未熟さから生じるものがあり、それは、未だ人間として未熟な段階にある「若い人すべての人たちに見られる心的現象」になるかと思う。つまり、自分の中に「二人の自分」がいるような「心的状態」であり、その「二人の自分」が、「心の中」で何かにつけてああでもないこうでもない葛藤し合っている状態であるが、その「二人の自分」が、やがて「一つに深く溶け合う地点」(これは、まさに「内的成長」の一つの到達点であるとともに、いわゆる本来の「自分自身」とめぐり逢う地点でもあり、そして、その本来の「自分自身」となることによってこそ、初めて、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間となる地点にもなるということである)。

一方、われわれ人間というのは、どれほど「内的成長」しても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされやすいという傾向があるかと思う。それは、一体、どうしてかと問えば、それは、われわれ人間の「知性や理性」(つまり「理知的部分」というのは、いわゆる「動物から人間へと進化してくる過程で生じてきた未だ未熟なもの」に過ぎないが、一方、われわれ人間の「欲望や感情的部分」というのは、ほかの動物たちにも共通したより根源的かつより本能的なものだからである。それゆえ、いわゆる「頭」(つまり「知性や理性」)ではわかっていても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうのも、ある程度は、仕方がないことなのかも知れない。

それはともかく、われわれ人間の「魂」というものを、プラトン風に「三つ」に分けてみると、——一つは、「欲望的部分」、一つは、「気概（激情）的部分」、そして、もう一つは、いわゆる「理知的部分」になるが、それはまた、「欲望的部分」に支配されている人、「気概（激情）的部分」に支配されている人、そして、「理知的部分」に支配されている人、というような「分類の仕方」もでき得るかと思う。

例えば、売春という行為を継続的に行なっているとすれば、それは、基本的には「欲望的部分」に支配されている状態になるだろうし、また、若い人などでツツパっているとすれば、それは、いわば「気概（激情）的部分」に支配されている状態になるのだろう。もちろん、どこに重点を置いて生きるかは、まさに各人の問題であって、他人がとやかく言う問題ではないかも知れないが、ただプラトンは、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されない限りは、真に「心の平穩」は得られないという考え方をしている。それは、なぜかと言えば、それは、いわゆる「欲望」には際限がなく、何度も何度も新たに満たさなければならぬとともに、その時々々の「欲望」が思うように満たされれば、それなりの「満足感」が得られるかも知れないが、逆に、思うように得られなければ、今度は、「不平、不満、怒り、恨み、憎しみ、憎悪、その他」などの感情に振りまわされてしまうものである。つまり、「欲望的部分」に支配されている人たちは、絶えず様々な「欲望や感情」などに振りまわされ続けている「心的状態」にあるということである。

一方、「気概（激情）的部分」に支配されている人たちというのは、基本的には「地位や名誉或いは男らしい気概」などを愛し求めるといふタイプであり、その「気概」が健全な方向に向かっていている間は、特に問題はないだろうが、その「気概」が悪い方向に向かえば、何かにつけて、他人とぶつかり、言い争っては、気に入らないことにはすぐに激怒して、ケンカをすることも多くなるかと思う。それは、いわゆる「男らしい気概」というものにあまりに固執するあまり、引くに引けずに、最後まで張り合ってしまうからである。

最後に、「理知的部分」に全面的に支配されるというのは、真に「内的成長」することによってこそ可能であり、それは、何よりも「真善美」を愛し求めてやまないという「魂」の状態になるということであり、それ以外は、「理知的部分」に全面的にはなく、それなりに支配されている状態であり、それゆえ、様々な「欲望や感情」などに容易に振りまわされてしまう傾向があるかと思う。もちろん、真に「内的成長」していても、様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうものではあるが、しかし、それは、その時だけであり、やがて、本来の何よりも「真善美」を愛し求めてやまないという「魂」の状態にもどるといふことであり、もし、いつまで経っても、元の状態に戻れないとすれば、それは、その人の持つて生まれた人間としての「資質や性格あるいは素質」などが、それほど優れたものではないのかも知れない。

三、セックスとは

さて、「売春」の問題であるが、それは、そのまま「セックス」の問題とも直結するものであり、それゆえ、「セックスとは何か」という問題にもなるかと思う。そこで、「セックスとは何か」という問いに対しては、セックスとは、いわゆる「性的欲求」（或いは「性的快感」）を満たそうとする行為であり、それは、基本的には「肉体の渇き」をいやす行

為であり、一方、いわゆる「心の渇き」を真に満たすものは、基本的には「愛情」ということになるかと思う。それゆえ、「売春」(或いは「回春」という形では、たとえ「性的欲求」(或いは「性的快感」)を満たすことはでき得るとしても、いわゆる「心の渇き」を真に満たすことは、でき得ないことである。なぜなら、「心の渇き」を真に満たすものは、まさに「愛情」に他ならないからである。——つまり、「心」(或いは「魂」)を真に満たすものは、結局は、「心」(或いは「魂」)であるというのが、まさに「最終的な結論」になるということである。

それでは、なぜ、われわれ人間というのは、異性の肉体をとおして自分の「性欲」を満たそうとするのだろうか？ それはもちろん、いわゆる「性的欲求」(或いは「性的快感」)を満たそうとするためであるとともに、最も根源的には、その人の「利己的な遺伝子」が自分の「仲間(子孫)」を増やそうとしているからである。つまり、その人をしてセックスをするように根底からつき動かしているものは、その人自身でも全く自覚できない「利己的な遺伝子」からの働きかけであり、その「利己的な遺伝子」こそは、何よりも自分の「仲間(子孫)」を増やすことを絶えず望んでいるからである。そして、その「利己的な遺伝子」からの働きかけこそは、一般に、「本能」と呼ばれているものであり、われわれ人間の「子孫保存欲」を根底から成り立たせている源泉の一つになるのである。

最後に、「売春」に関する、いわゆる「善悪の問題」が残っているかと思うが、その「善悪の問題」を取り扱うのは、まさにわれわれ人間の「理知的部分」の働きであるとともに、その「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、いわゆる「売春」という行為を「善いもの」とは認めることができないのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、われわれ人間の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、基本的には、「……偽よりは真、悪よりは善、醜よりは美、そして、俗よりは聖」に価値を置くような傾向が強く、それゆえ、「売春」という行為に対しては、そこに「純粹性」(或いは「真善美」)を認めることができにくいがために、どうしても「善い行為」とは認めることができにくいということである。

一方、われわれ人間の「欲望的部分」(或いは「本能的部分」というのは、むしろ「売春」という行為は、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものはないだろうという意識を生み出しているものである。そして、われわれ人間は、この「欲望的部分」と「理知的部分」とを同時に持ち合わせているがために、この「二つのもの」が、絶えず「心の中」で葛藤を繰り返して、ある時には、いわゆる「理知的部分」が「欲望的部分」をコントロールできている場合もあれば、逆に、「欲望的部分」に負けてしまい、ついつい「浮気や不倫或いは売春(回春)」というような行為を行なってしまふということである。それは、いわゆる「欲望的部分」に振りまわされている「心的状態」であり、その状態をわれわれ人間の「理知的部分」から見れば、どうしてもそれを「善いこと」とは認めにくいということである。——なぜなら、そこに「不純性」をみてしまうからである。それゆえ、われわれ人間は、他人の「浮気や不倫或いは売春(回春)」というような行為をみると、どうしても批判的になるのも、われわれ人間の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、本来的に何よりも「純粹性」(或いは「真善美」)を愛し求める傾向が強いからである。

もちろん、実際には、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」などが複

雑かつ微妙にからみ合っては、われわれ人間のまさに現実の生々しい「言動」を生み出して
いることになるのだろう。

*

*

売春の起源

売春の起源について

さて、「売春」の起源としては、人類の歴史とともに極めて古くから行なわれてきたものであるが、その「売春」というもの（その仕組み）が成立するためには、どうしても富めるものと貧しいものが、その社会に発生することがその大前提になるかと思う。というのも、貨幣もなく、すべての人たちが同じような経済レベルで共同で生活していたような時には、いわゆる「売春」という行為は、一般的には発生しにくいのではないかと思う。

やがて、富めるものと貧しいものとが自然発生的に生じてきた時に、富める側の人たちは、その富める力で、いろいろなものを手に入れようとするものであるが、その一つとして、いわゆる「女性」たちがその対象になったということである。つまり、富める側の人たち、そのほとんどは、男性であるが、その富める側の人たちは、一方の貧しい側の人たちのなかに存在する女性たちにも目をつけて、その貧しい側の人たちのなかに存在する女性たちを、いわば何とか手に入れようとするものであるが、その場合、大別すれば、次の二つの場合が考えられるかと思う。その一つは、女性自身、相手の男性の人間的魅力に心惹かれてなのか、それとも家柄や経済力その他などの魅力に心惹かれてなのか、その他、どのような理由からであれ、その人なりに納得して、富める側の相手の男性のところを身を寄せるような場合と、もうひとつは、そうではなく、相手の経済力の力などによって、多くは無理やり「買い取られる」（例えば「人身売買」的なもの）が自然発生的に生じて、そのような方法で女性を手に入れるような場合もあったかと思う。

もちろん、この段階では、まだ「売春」という行為は、発生していないことになる。そして、「売春」という行為が発生するためには、もう一つの存在が、どうしても必要不可欠になるということである。それは、いったい何かと問えば、それは、「売春」が成立するための「場」というものであり、その「場」というものが、どうしても必要不可欠になって来るということである。そして、その「場」というものは、古くは「売春宿」、そして、今日では「風俗店」、あるいは何らかの「売春組織」ということになるかと思う。

さて、「売春」が成立するためには、どうしても次の「三つのもの」が一般的には必要不可欠になって来るかと思う。その一つは、富める側の人たちであり、その次には、貧しい側に存在する女性たちであり、そして、もう一つは、この「二つのもの」が結びつくための「場」（多くは「売春宿」ということである。もちろん、三番目の「場」というものを媒介とせずに、直接、相手との交渉によって、「売春」が成立するという場合も多いかと思うが、その場合、例えば、援助交際というものがあるが、それは、買う側の男性と、売る側の女性とが存在し、そして、もう一つ、目に見えない「場」（つまり「女性自身のみずから売春宿の主」となって交渉し、いわゆる「売春」が、実際に行なわれていくということであり、結局は、同じことになるかと思う。

そして、その「売春宿」に存在する女性たちというのは、多くの場合（或いは「ほとんどの場合」）、もともとは、貧しい側の人たちであり、そのためにこそ、自ら望んでそのようなところに身を寄せたのか、それとも何らかの人身売買的な形で売られてきたのか、その他、どのような理由からであれ、そこに存在する女性たちというのは、もともとは、貧しい側の人たちであったということである。というのも、もともと富める側の女性たちであるならば、何も「売春行為」などを行なう必要などどこにもなく、その富める力によ

って、いくらでも相手を「手に入れる」ことができ得るからである。つまり、「売春」というものが成立するためには、どうしても「お金を持っている側」と「お金を必要とする側」との存在が、何よりも必要不可欠であり、そのためにこそ、「売春」行為というものが発生するということである。もし「お金というものをまったく必要としない、むしろいらぬという」ならば、そもそも「売春」など行なう必要などどこにもなく、セックスを楽しむ「遊び」行為か、或いは、愛情関係から生じる「恋愛」などを心から楽しめば、それでよいということである。

つまり、「売春」行為というのは、何よりも「お金を手に入れるための行為」であり、それ以外の理由は、すべて二次的なことになる。それが、まさに「売春」行為というものの実体である、ということである。それゆえ、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものはないではないかという考え方があるかと思うが、その場合、お金が手に入ることこそが第一であり、セックスが楽しめるかどうかなどは、所詮、二の次になるといえるのが、まさに「売春」行為である、ということである。

一、売春は、なぜ悪いのか？

さて、「売春」は、なぜ悪いのか？ この「問い」に対する最終的な「答え」も、ここを出しておきたいと思うが、それは、次のようになるかと思う。

まず、「売春」の起源としては、上述のように富める側と貧しい側とが存在し、そして、貧しい側では、このままではとても生きていけない、あるいはとても生活できないというような状況に追い込まれた時に、その家族のためとか、あるいは家族（或いは「自分」）が生きていくためにはどうしてもとか、あるいは借金の返済のためとか、その他、どのような理由からであれ、何らかの理由によって、いわゆる「身を売る」という行為（行動）が生じて来るといえることである。そして、そのような「行為」（行動）が成立するためには、当然のことながら、それを「買う側の人たち」がどうしても必要不可欠になるかと思うが、それがまさに「富める側の人たち」（つまり「少なくとも女性を買うだけのお金を持っている人たち」ということであるとともに、そのような「場」を提供してくれるものが、いわゆる「売春宿」ということになるかと思う。

そして、そのような「場」を提供してくれる人たち、つまり、「売春宿」を経営している人たちというのは、当然のことながら、そこで働いてくれる女性たちが必要不可欠であり、そのような女性たちをどこから見つけるのかと言え、そのほとんどが、いわば「貧しい側の人たちのなかに存在する女性たち」であり、その中でも、「お金がどうしても必要不可欠であると差し迫っているような人たち」が多いかと思うが、その場合、女性自らが進んでそのような場所に入っていくような場合もあれば、何らかの「人身売買的」な形で手に入れるというような場合もあるかと思う。そして、そのような形で手に入れた女性たちを、いわば「売春婦」として働かせることになるかと思うが、その場合、その女性たちを人間として大事に扱うような場合もあれば、逆に、非人道的な形で扱うような場合もあり、とくに後者の場合には、いわば「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる危険性が高くなる」ということである。

そして、この「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる」ということこそが、すな

わち、「売春の禁止」(つまり「売春はよくない」という考え方が成立する、もともとの起源と考えてもよいのではないかと思う。もちろん、たとえ人間として大事に扱われているとしても、そこで行なわれていることは、結局は、物のように「人間」が金で売買されているということであり、それゆえ、いわゆる「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる」ということでは、何ら変わるところはないとともに、そのような「場」が、また、様々な「犯罪の温床」ともなり得るということである。

例えば、今日では、「インターネット」というものが世界中に普及している中で、そのような「場」を利用して、つまり、今までのような「売春宿」というような「場」ではなく、インターネット上の「場」というものを利用して、例えば、出会い系サイトなどを介して、いわゆる「売春」などが横行し、その結果、実に様々な「犯罪」などが生じることもなるということである。というのも、「売春」という行為(行動)は、ただ単に「売春」という行為(行動)だけに留まるものではなく、そこには実に様々な「利害」や「損得」その他などが実に生々しく複雑にからみ合ってくるものであり、それゆえ、その結果として、実に様々な「犯罪の温床」ともなりやすいということである。

二、売春の実態

さて、今までは「売春」とその周辺の問題について考えてきたわけであるが、最後に、「売春」そのものが、なぜ悪いのか？ この問題に対しても答えておきたいと思う。

例えば、『売春防止法』の冒頭には、「……この法律は、売春が人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすものであることにかんがみて」とあり、また、その売春の定義としては、「……対償を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交すること」であるととなっている。つまり、なぜ、「売春」が悪いのかと言えば、それは、「……人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすもの」であるからであり、それが、まさに「法律上の理由」になっているということである。

もちろん、この問題を徹底的に考える場合には、どうしても実際に「売春」をしている人たち、あるいは過去に「売春」をした経験のある人たちが、その結果として、一つは、精神面で、一つは、肉体面で、一体、どういふ影響を受けたのか、あるいは現に受けているのか、ということを徹底的に考察してみなければならぬが、そのようなことは、極めて長い時間と困難とを伴うものである中で、ここでは、ごく一般的な考察だけに留めておきたいと思うが、まず、精神面で受ける影響というものには、一体、どういふものがあるのだろうか。例えば、「売春」を行なう前と、「売春」を行なった後では、一体、何がどう変わるのだろうか、それとも、特に変わるところはないのだろうか。この問題に答えを出すことは、極めて難しいことではあるが、恐らく、次のようになるかと思う。

例えば、われわれ人間の「魂」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、その場合、その人が「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)に強く支配されているような人であるならば、いわゆる「罪悪感」(或いは「自責の念」)などに襲われる傾向は、それだけ強くなるだろうし、逆に、いわゆる「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)の支配よりも、いわゆる「欲望的部分」の支配のほうがより強い人であれば、

それだけ「罪悪感」(或いは「自責の念」)などに襲われる傾向は、それだけ弱くなるということである。

もちろん、それに加えて、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)が、どのくらい「成長・成熟」しているかによっても、違いがはっきりと生じて来るものであり、それゆえ、たとえ「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)に強く支配されているとしても、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)が、まだ未熟な状態であるならば、例えば、正義でもないことを何か正義だと思い込んで、逆に、不正なことを行なってみたり、また、勇気でもないことを何か勇気だと思い込んで、逆に、無謀で愚かなことなどを行なってみたり、あるいは、何よりも大事なものを粗末に扱い、それほどでもないようなものを何か非常に価値あるもののように思い込んだりしやすいものである。だからこそ、真の意味での「内的成長」というのは、どうしても必要不可欠になって来るということである。

例えば、過去に、あるいは現在、売春を行なっているということ、後ろめたい気持ちや負い目を感じたり、また、他人に知られることを恐れたり、そのことで脅(おど)されていたり、あるいは「人間関係」が崩(くず)れてしまう「危険」(リスク)が生じる場合もあれば、むしろ、人によっては、「売春やセックス」が楽しくてしようがないという場合もあるだろうが、また、それは、「精神面」だけではなく、もう一方の「肉体面」においても、例えば、性的に弄(もて)まれる嫌悪感などをはじめ、「……性病、妊娠、中絶、性的暴力や傷害、屈辱的な扱い、その他」、そのような何らかの「実害」の被害を受けるようなことで、いわゆる「情緒的不安定」に深く陥るといふ危険性(リスク)が生じる場合もあるのだろう。

それゆえ、本来であれば、「売春」など行なわないほうがよいわけだが、それでは、なぜ「売春」を行なうのかと言えば、その多くは、結局は、「お金がほしいから」であり、もし「お金などいらぬ」というならば、そもそも「売春」を行なう必要などどこにもなく、セックスを楽しむ「遊び」なり、あるいは愛情関係から生じる「恋愛」などでよいということになるのだろう。しかし、それは、そうではなく、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るといふ、いわば「一石二鳥」を考えているからだという場合もあるかと思う。その場合、そのどちらにより重点が置かれているかによって、つまり、遊びの方により重点がおかれる場合には、いわば「遊び」型売春であり、一方、何よりもお金のほうに重点がおかれるものこそは、まさに「本来」型売春ということである。

そして、「遊び」型売春というのは、多くの場合、それほど差し迫った状況ではなく、例えば、なにか買いたいものがあるからとか、どこか旅行に行きたいからとか、あるいは何か遊ぶための小遣いなどがほしいからというような、いわば比較的軽い意識から手っ取り早くお金を手に入れるための手段としての「売春」であり、例えば、未成年者たちが遊び感覚で行なっている「売春」などは、ほとんどこの範疇に属するものではないかと思う。

一方、「本来」型売春というのは、多くの場合、差し迫った状況から生じる場合が多く、どうしてもお金がほしいということであり、しかも、ある程度まとまったお金がほしいという、その他、そのような理由からこそ、いわゆる「売春」を行なうという場合である。その場合、本人が望んで、あるいはいやいやであれ、ともかく本人の意志でそのようなことを行なう場合と、もう一つは、本人の意志とはまったく関係なく、いわば無理やりあるいは人身売買的な形で、そのような状況に置かれてしまうという場合があるかと思う。

例えば、風俗店などで働いている女性たちというのは、ほとんどの場合、最初は、貧しい状態（つまり「お金がほしい」という状態）から入っていくことになるかと思うが、しかし、やがては、一般の人たちよりも多くのお金を手に入れることも多くなり、そのような状況になっても、なお続ける理由としては、一つには、やはりもつとお金がほしいという場合もあるだろうし、また、楽しいからという理由もあるかも知れないし、あるいはなにかお店を持ちたいからとか、お客さんが喜んでくれるからとか、その他、そのような理由によって続ける場合が多いのではないかと思う。ただ、ここではつきりと区別しておかなければならないことは、主に接客を中心とし、肉体的な接触などはあるとしても、性交渉そのものは行なわないという場合と、もう一つは、直接、性交渉（或いは「それとほとんど同じようなこと」）を行なう場合と、この二つの場合があるということである。そして、前者の場合には、当然のことながら、「売春」行為とはならず、後者だけが、いわば「売春行為」になるということである。

それでは、一般的な「仕事」と、いわゆる「風俗的な仕事」との決定的な違いは、一体、どこにあるのかと問えば、もちろん、いろいろなものがあるだろうが、その一つとして、それは、一般的な「仕事」では、どうしても限られた収入しか手にすることはできにくい。一方、「風俗的な仕事」の場合には、まとまったお金を短期間で一気に手にすることが可能であるということである。例えば、もし「一般の仕事」と「風俗の仕事」とが同じような収入であるならば、多くの女性たちは、好んでそのような「場」で働くことを、心の底から望むだろうか？ もし「心の底から望む」ということであれば、それは、根っからそういう「場所」が好きだということであり、それは、その人にとっては、まさに「天職」ということになるのかも知れない。

三、結論

さて、「売春」行為とは、すなわち、「お金を得るため」の一つの手段であり、しかも、ある程度まとまったお金を短期間で一気に手にするためのかなり有効な手段の一つであるということである。それ以外のもつともらしい説明は、すべて無意味な説明になるかと思う。そして、そのようなことが可能になるためには、どうしても「富める人たちが不可欠であり、そのような人たちがいて、しかも、できるだけ高く買ってくれる人たちがいて、はじめて「まとまったお金を短期間で一気に手にすることが可能になる」ということである。もちろん、それら「二つのもの」だけでは、まだ不十分であり、それらに加えて、もう一つ、この「二つのもの」（つまり「買う側」と「売る側」と）がめぐり逢うための「場」というものが、どうしても必要不可欠になって来るかと思うが、その「場」を提供してくれるものとして、古くは「売春宿」、そして、今日では「風俗店」、あるいは「インターネット」なども、そのような「場」に十分になり得るということである。

それでは、なぜそのような「場」を提供するのかと言えば、それは、言うまでもなく、そこには「大きな金が流れ込む」からであり、それ以外の理由も、まったく意味をなさない。というのも、「大きな金が手に入らない」どころか、逆に「赤字」になるようであるならば、誰も好んでそのような「場」を提供しようとはしないだろう。

つまり、「売春」というのは、「買う側」とっては、手っ取り早く自分の「性欲」を

満たすことができるという利点があり、一方、「売る側」と「場」を提供する側には、手っ取り早く「お金を手にすることができる」という利点があるということである。それ以外、基本的には何もないということである。そして、この三者の「利害」がうまくかみ合った時に、はじめて「売春」という行為は、成立するとともに、この三者の「利害」が、うまくかみ合わずもつれた時には、実に様々な「揉め事」が発生することにもなるということである。

それでは、なぜ悪いとされていることを敢えて行なおうとするのかと言えば、それは、それほどまでにわれわれ人間の「性欲」というものは、どこまでも根強い「根源的なもの」であるとともに、一方、生きるためにはどうしても「お金」が必要不可欠であるという、もう一つの根源的な「理由」以外、いかなる理由もないのである。だからこそ、人類の歴史とともに、この問題は、決して途絶えることがないとともに、この問題を「完全なる形」で解くことが、なかなかできにくい理由の一つにもなるのだろう。それほどまでにこの問題は、われわれ人間の最も根源的な「問題」とどこまでも深く関わってくる問題であり、それゆえ、イエス・キリストも、そのような場面に直面した時に、まさに「黙するしかなかった」ということにもなるのだろう。

*

*

「参考文献」

※底本「世界の名著・プラトンⅠ」（中央公論社）

※底本「福音書」塚本虎二訳（岩波文庫）